

赤木桁平

芸術的要素の変遷



# 芸術的要素の変遷



『文学評論』第六編ダニエル・デフォーの小説に就いての研究中に於いて、漱石先生は凡そ次ぎのようなことを云っていられる。

……余は此前のところで、長い物を短く読ませる方法として興味が一貫せねばならぬと云ったが、その興味の如何なるものかは未だ説明しなかった。そこで先ずこれからして少しく詮義して見たい。興味

とは英語の所謂 *interest* で主観的な感じである。これを一層明かにするためには分類して見る必要がある。而して興味なる文字の性質から云うて主観的な感じであるからして、矢張り主観的な分類でなければならぬ。同時にこの主観的な感じの原因になるもの即ち其対象に依って分類することも出来る。此方から云えば客観的な分類である。客観的な分類とは小説にあらわれた材料に依って分類をすれば千差万別になるではあるうが、これを総括すれば、(1) 小説中の性格 (*character*) より起る興味、(2) 小説中の事件

(incident) より起る興味、(3)小説中の景物 (scene) より起る興味となる。

漱石先生に従うと、芸術品の内容を構成する要素、即ち芸術的要素を分類すると、大体に於いて、これを主観的要素と客観的要素との二つに大別することが出来る。先生は、この客観的要素を以て直ちに材料そのものを意味するものであると倣<sup>な</sup>し、この材料を分類して、さらに性格と、事件と、景物との三つに区分していられるのである。

芸術的興味の焦点をその材料に就いて考覈こうかくしようとする漱石先生の説は、先生自身が既に「是は一見甚だ明瞭な区別の様に思われるが、少し考えて見ると、大分混雑して来る」と自白されているように、かなり曖昧な、かなり不鮮明な個所を持っているのではないが、先ず以て妥当に近い意見だと云っている。——依って、自分は茲ここに先生自身の意見を踏襲し、そうした視点から極く簡単に先生の作品に於ける芸術的要素の変遷を考察して見ようと思う。

『吾輩は猫である』に始まって『四篇』に至る漱石先生



の所謂「ロマンチズムの時代」に属する作品に於いては、その芸術的要素が著しく主観的に偏し、兎角知識的若しくは感情的要素の過重された傾向があるが、その客観的要素たる材料にあつては、最も閑却されているのが性格である。尤も『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』のような作品には、ある程度まで先生独特の性格描写（但し、前者のそれはカリカチュールリングの興味ではあるが）があつて、慥たしかにそれらの作品に於ける重要な特徴の一つを形作っているには相違ないが、併し、それらの作品が有する芸術的興味の焦点は、決してその性格描写の

一点に存しているのではなく、寧ろその作品中に描かれている事件そのものの方にあると、このことを妥当とする。

そうした傾向の著しく現れているのは、『漾虚集』ようきよしゅうに収

められている諸篇であつて、例えば『倫敦塔』や『琴の

そら音』などに於いて見るように、それらの作品の有す

る芸術的興味の焦点は、その濃厚なる主観的要素の上に

あるに非ずんば、必ずやその客観的要素たる景物か、若

しくは事件（尤もインシデントと称するほど衝動的ではな

いが）かの上にあるのである。さらに一步を進めて、『草

枕』、『二百十日』、『四篇』に於ける大部分の作品など

に至っては、所謂性格活動の齎もたらす興味が、殆んど地を  
払って空しくあると同時に、その客観的要素たる材料の  
齎す興味は、事件よりも寧ろより多く景物の方に傾いて  
いる。こう考え及ぼして見ると、先生の所謂「ロマンチ  
シズムの時代」に属する作品の多くは、その芸術的興味  
の焦点を主観的要素の上に置き、その客観的要素として  
の材料の中にあつては、最も事件と景物とを重視した傾  
向がある。——『野分』のごとき作品に於いても、表面  
上客観的要素が極めて濃厚（例えば白井道也や高柳の性格  
描写、最後の原稿買取りの事件など）であるにも関らず、

その實際に就いて見ると、芸術的興味の焦点は矢張主觀的要素の上にあるのを否めない。

漱石先生の芸術的生涯に於ける第二期、即ち『虞美人草』に始まって『門』に至る所謂「轉向の時代」に於ける先生の作品に於いては、明かに主觀的要素の減退を見出すことが出来るとともに、また、客觀的要素の増進をも発見することが出来る。中にも著しく眼に着く事實は、客觀的要素としての材料たる性格描写が、この期に属する作品の芸術的興味の焦点を形作り、その他の客觀的要素たる事件や景物やは、殆んど純然たる從屬的地位に蹴

落されていることである。尤も、この期の初期に属する『虞美人草』や『三四郎』のごとき作品には、まだかなり多量なる事件や景物に就いての興味が附加されているばかりでなく、かの『坑夫』のごとき作品に至っては、殆んど何等の性格描写をも見出すことは出来ないが、その大体に於いての傾向が著しく客観的要素の増進を示し、且つ、その客観的要素の中心的興味が、主として所謂性格描写にあることは、「業績の概観」に於いて、自分が既に悉しく説明して置いた通りである。——この性格描写に次いで、最も重きをなすところの客観的要素は

事件であつて、中にも『虞美人草』や『それから』のごとき作品に於いては、特にその事件の齎す芸術的興味が強調されているようである。『坑夫』の有する芸術的興味も、また、主として事件にあると云いたいようではあるが、仔細にこれを検覈けんかくすると、事件というより景物とというのが寧ろ至当であるかも知れない。

さらに漱石先生の芸術的生涯に於ける第三期、即ち『彼岸過迄』に始まつて『明暗』に終る所謂「リアリズムの時代」に属する先生の作品に於いては、再び主観的要素の濃厚を加え来るとともに、その客観的要素の配合が、

著しく平分的になっている。従つてこの時期に於ける作品に就いて特に注意を要することは、その客観的要素たるべき性格なり、事件なり、景物なりが、皆それぞれの度合に於いて芸術的興味の対象を形作つていながら、しかもその焦点的とも云うべき興味の中心は、それらのあらゆる客観的要素よりも寧ろ主観的要素たる心理（知識的要素）の描写にあるということである。併し、もつと公平に云うと、この期に属する作品の芸術的興味は、その主客両方面の要素に於いて著しく均齊的になり、すべての芸術的要素が最も調和されたる形に於いて按配せら

れているがために、その最も新しく採択された要素が、特に鮮かなる効果を挙げえたのだとも云いえよう。例えば、最後の大作『明暗』を見てもいい。そこには明かに性格が持ち来した芸術的興味もあれば、また、そこには明かに事件や景物が持ち来した芸術的興味もある。然かのみならず、それらの複雑なる客観的要素に対して最も濃厚なる主観的要素が加味され、すべての芸術的要素が渾然たる融会に達して、殆んど何等の欠点をも感ぜしめない完成を示しているのである。この点は、独り『明暗』に限らず、『道草』に於いても、また、『行人』に於い



ても、既に業に明白なる特長として現れているのである。

漱石先生の芸術的生涯に於けるロマンチズムからリアリズムへの推移は、それが先生自身の内的生活に於ける捷利しやうりと生長とを指示する意味に於いて、もとより興味の深い事実であるに相違ない。併し、この際自分がより一層面白く感ずることは、如上じよじよう述べ来った芸術的要素の変遷が、果して必然であるかどうかは分らないが、兎に角その終りに近づくに従い、ますます円熟渾融の極致に到達していることである。この点に於いて自分はいくまで内的生活と芸術生活との一致を信ずるものであつ

て、その内的生活に於ける充実は、取りも直さず、その芸術生活に於ける充実を意味するものだと思っている。蓋し、<sup>けだ</sup>芸術的要素の変遷は、その動因を主として個人生活の体験的背景に潜めているからであろう。





日本文学電子図書館

---

芸術的要素の変遷

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石」

講談社学術文庫、講談社  
2015年12月10日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館